

<研究紹介>  
研究プロジェクト（2013–2025）を俯瞰する：  
文化の変容・名前・自尊心  
A brief overview of research projects (2013–2025):  
Cultural change, names, and self-esteem

荻原祐二\*

Yuji Ogihara

### 概要

本論文では、著者が筆頭研究者としてこれまで行ってきた、複数の研究プロジェクト（2013–2025）の概要を説明し、その相互の関連を整理することで、研究プロジェクトの全体像を俯瞰した。著者はこれまで大きく分けて、(1) 文化の変容が心理に与える影響（特に、日本文化の個人主義化に伴う不適応問題）、(2) 文化の変容、(3) 名前、(4) 自尊心の年齢差、について研究を行ってきた。中核のプロジェクトは、文化の変容が心理に与える影響を明らかにすることであり、そのために、文化の変容・名前・自尊心の年齢差に関する研究を連携プロジェクトとして行ってきた。

### Abstract

This article briefly explains some research projects that the author has conducted as a principal investigator between 2013 and 2025 and shows their connections, providing a big picture of the research projects. The author has conducted research mainly on (1) how cultural changes affect human psychology and behavior (especially ramifications of changes toward greater individualism in Japanese culture), (2) cultural change, (3) names, and (4) age differences in self-esteem. The core project is to clarify how cultural changes affect human psychology and behavior, and for this purpose, satellite projects on cultural change, names, and age differences in self-esteem have been advanced.

**キーワード：**文化の変容、名前、自尊心、個人主義、心理

**keywords:** cultural change, name, self-esteem, individualism, psychology

本論文では、著者が筆頭研究者として 2013 年から 2025 年までに行ってきた、複数の研究プロジェクトの概要を紹介し、その相互の関連を概観する。一般的なレビュー論文では、理論や学術的なまとまりごとに、研究が整理され説明される†。一方で本論文では、

\* 青山学院大学教育人間科学部心理学科（Department of Psychology, College of Education, Psychology and Human Studies, Aoyama Gakuin University）

† 著者もこれまで 5 本のレビュー論文を公刊してきた（Ogihara, 2017, 2018a, 2025d; 荻原, 2023a, 2025）。理論や学術的なまとまりごとの研究の詳細は、これらのレビュー論文を参照のこと。

著者のこれまでの研究をプロジェクトごとに整理し、概観する。

著者がこれまで行ってきた研究は、大きく捉えると以下の4つのプロジェクトに分けることができる（他にも、個人主義の地域差（Ogihara, 2020b<sup>1</sup>）や、対人関係におけるコントロール方略（荻原他, 2013<sup>2</sup>）などの研究も行ってきたが、プロジェクトと見なすには論文数が少ないため、ここでは取り上げない）†。

- (1) 文化の変容が心理に与える影響（特に、日本文化の個人主義化に伴う不適応問題）
- (2) 文化の変容
- (3) 名前
- (4) 自尊心の年齢差

そして、この4つのプロジェクトの関連を図1に示した。中核（コア）プロジェクトは「文化の変容が心理に与える影響」で、それ以外の3つは中核プロジェクトを進めるための連携（サテライト）プロジェクトとも言える。

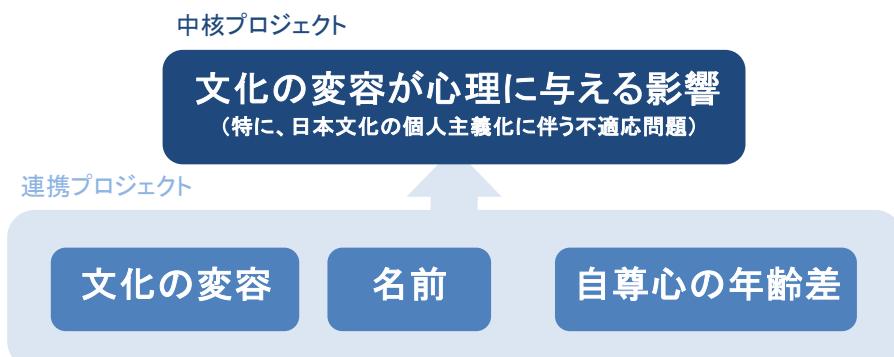


図1 研究プロジェクトの全体像（著者作成）

以下に、各プロジェクトの概要と、その相互の関連について簡潔に説明する。本論文の目的はプロジェクトの全体像を俯瞰することにあるため、各プロジェクト・研究の詳細な説明は別の機会に行うこととする（または、各プロジェクトの論文を参照）。また、理論ベースの説明には理論の背景や知見の意義等を含めた詳細な説明が必要となるため、本論文では現象ベースで研究を紹介する。

## I. 文化の変容が心理に与える影響

### 1. 概要

このプロジェクトでは、文化の変容が心理に与える影響、または文化の変容とその心理的帰結について明らかにしてきた。その中でも、日本文化の個人主義化が、対人関係や幸福感にどのような影響を与えていたか、特に個人主義化に伴う不適応問題を検討してきた（レビューとして、Ogihara, 2017<sup>3</sup>）。

† 実際には、各プロジェクトは独立したものではなく、各研究は複数のプロジェクトに含まれるが、本論文では可能な限りどれかひとつのプロジェクトに属するものとして説明した。

日本とアメリカで個人主義傾向・親しい友人の数、主観的幸福感の関連を調べたところ、日本では、個人主義傾向が友人の数や主観的幸福感と負の関連が見られるのに対して、アメリカではそうした関連が見られなかった（Ogihara & Uchida, 2014<sup>4</sup>）。さらに、日本において個人主義という概念がどのように捉えられているかを検討したところ、「独立」や「自由」をもたらすポジティブな要素だけでなく、「良好な対人関係を損なうもの」というネガティブな要素も同時に認識されており、結果としてニュートラルに捉えられていることを明らかにした（Ogihara et al., 2014<sup>5</sup>）。

また、日本の変化と比較しながら、グローバル化が進むブータンにおける、幸福感や対人関係についての考察も行った（荻原, 2013<sup>6</sup>）。

## 2. 位置づけ

著者の中核のプロジェクトである。以下で説明する文化の変容プロジェクトとも密接に関連しているが、このプロジェクトは特に、変容そのものよりも、その変容を背景として、現在の日本で生じている現象に焦点を当てている。

現代の日本人や日本社会・文化について理解するためには、過去との比較という縦の視点と、他国・他文化との比較という横の視点を持つことが重要である。現在の自分そのものや、自分を取り囲む環境は、「当たり前」の存在になっていることが多いため、個別性や特殊性があったとしてもそれに気がつきにくく、その性質や特徴を理解しづらいことがある。その「当たり前」は、過去や他国・他文化と比較することで浮き彫りになり、理解が促進されることがある<sup>§</sup>。

しかし、以下で述べる通り、文化の変容が心理に与える影響を明らかにするためには、文化の変容も、対象となる心理においても、その基礎となるエビデンスが十分とは言えないことが多かった。そのため、以下の連携プロジェクトを行ってきた。

## II. 文化的変容

### 1. 概要

このプロジェクトでは、文化の変容に関する基礎的な研究を行ってきた（レビューとして、Ogihara, 2017<sup>3</sup>, 2018a<sup>7</sup>; 荻原, 2025<sup>8</sup>）。まず、日本において個性的な名前が増えていることを実証し、日本文化の個人主義化を示した（Ogihara, 2021a<sup>9</sup>, 2022a<sup>10</sup>; Ogihara et al., 2015<sup>11</sup>; Ogihara & Ito, 2022<sup>12</sup>; レビューとして, Ogihara, 2025d<sup>13</sup>; 荻原, 2023a<sup>14</sup>, 2025<sup>8</sup>）。また、中国（Ogihara, 2020d<sup>15</sup>, 2023b<sup>16</sup>）やフランス（Ogihara, in press<sup>17</sup>）など、他文化における個性的な名前の増加についても議論した。さらに、個性的な名前だけでなく、個性的な犬種を家庭動物として選択する傾向が高まっていることからも、個人主義化を示した（Ogihara & Uchida, 2024<sup>18</sup>）。

<sup>§</sup> 本論文の目的は、著者の研究プロジェクトの概要を説明することであるため、研究アプローチの詳細については、別の機会に行うこととする。

個性に着目した検討だけでなく、独立性・自立性に着目した検討も行ってきた。日本（Ogihara, 2018b<sup>19</sup>）と中国（Ogihara, 2023a<sup>20</sup>）の家族構造を分析し、人々が家族集団から独立して生活する傾向が高まっていることを示し、個人主義化を実証した。

加えて、個人主義化だけでなく、他の種類の文化変容についても検討してきた。日本において、自尊心が経時に低下していることを示した（Ogihara, 2016b<sup>21</sup>; Ogihara et al., 2016<sup>22</sup>; 荻原, 2018<sup>23</sup>）。また、日本で個人主義と関連がある成果主義制度が増加していることも示した（荻原, 2017<sup>24</sup>）。

さらに、文化の変容を検討する手法として、新聞データベースを用いて変化を定量化する方法を提案し（Ogihara, 2024<sup>25</sup>, 2025b<sup>26</sup>）、実践してきた（Ogihara & Uchida, 2024<sup>18</sup>）。

## 2. 位置づけ

中核プロジェクトは文化の変容が心理に与える影響を明らかにすることであるが、その研究を進めるために必要な情報や知見を提供するための連携プロジェクトと言える。中核プロジェクトの考察や解釈をより的確に、より深く・広くするためにも必要なプロジェクトである。連携プロジェクトの中でも最もリソースを割いてきたプロジェクトもある。

心理学は、調査や実験、面接、観察など、「現在の」心理を検討することが多く、過去に戻ってこうした検討を行うことはできないため、基本的には時間の要素と相性があまり良くない。そのため、文化の変容という時間軸を考慮した取組は、心理学においても以前と比べると増えている\*\*ように感じられるが、それでも十分とは言い難い。実際に、日本人の心理・行動傾向がどのように変化しているかといったトピックについて、エビデンスを基に議論・考察しているものは多くはない。

## III. 名前

### 1. 概要

このプロジェクトでは、名前にに関する基礎研究を行ってきた（レビューとして、荻原, 2023a<sup>14</sup>, 2025<sup>8</sup>; Ogihara, 2025d<sup>13</sup>）。特に、個性的な名前にに関する基礎的な研究を行い、さらにより基盤となる、個性的な名前に限らない名前全体の研究も行ってきた。名前を用いて文化の変容を検討した研究は、2章に含めている。

個性的な名前にに関する研究として、まず近年の日本における個性的な名前の特徴と類型を整理した（荻原, 2015<sup>27</sup>; Ogihara, 2021b<sup>28</sup>）。また、個性的な名前が個人主義傾向を反映していること（Ogihara, 2023c<sup>29</sup>）や、名前の大衆性と多様性には負の関連があること（Ogihara, 2025c<sup>30</sup>）も示した。さらに、世間一般で個性的な名前として扱われることが多

\*\* 近年では、心理学における再現性の低さが問題視され、追試の重要性が高まってきた。その過程で、過去のオリジナル研究と現在の追試研究の比較が行われ、時間による心理の変化についても議論される機会が増えているように見える。

い「キラキラネーム」に関する研究も行い、定義（荻原, 2022a<sup>31</sup>, 2023b<sup>32</sup>）や表記（荻原, 2023b<sup>32</sup>, 2023d<sup>33</sup>）、キラキラネームの頻度の変化（荻原, 2022b<sup>34</sup>）についても検討した。加えて、より現代的・時事的な視点から、戸籍法改正が個性的な名前に与える影響（荻原, 2023c<sup>35</sup>）についても検討した。

個性的な名前を検討するために、より基礎的な名前の研究として、個性的な名前を創り上げる要因のひとつとなっている、日本の名前がいかに読むことが難しいか（Ogihara, 2021c<sup>36</sup>, 2022d<sup>37</sup>; 荻原, 2022c<sup>38</sup>）についても実証的に検討した。また、中国・モンゴルにおける民族と名前の関係（Ogihara, 2022c<sup>39</sup>）や名前を検討する際に重要となるデータの公開（Ogihara, 2020a<sup>40</sup>, 2022b<sup>41</sup>, 2025a<sup>42</sup>）、アメリカ（Ogihara, 2021d<sup>43</sup>）と日本（荻原, 2022d<sup>44</sup>）における名前データベースに関する情報の整理・公開も行ってきた。さらに、人間だけではなく、Virtual YouTuber（VTuber）の名前（荻原, 2024<sup>45</sup>）についても検討した。

## 2. 位置づけ

中核プロジェクトである文化の変容が心理に与える影響及び、連携プロジェクトである文化の変容に関する研究を進める上で、名前を対象に研究を行ってきた。その名前に關して、土台となるべき基礎的な知見が、日本では十分には蓄積されていなかった。考察や仮説はあるが、データに基づくエビデンスが十分でないことが多かった。

また、名前そのものが魅力的な研究対象であったことも、研究を進めることとなった理由のひとつである††。

## IV. 自尊心の年齢差

### 1. 概要

このプロジェクトでは、日本における自尊心の年齢差を明らかにしてきた。日本の 16 歳の青年から 88 歳の高齢者における自尊心の年齢差について検討し、青年で低く、成人から高齢者まで徐々に高くなっていることを示した（Ogihara & Kusumi, 2020<sup>46</sup>）。さらに、自尊心の一要素である自己好意（self-loving）が、小学生で高く、中学生・高校生は低く、その後 60 代まで年齢が高い程、自己好意が高いことを示した（Ogihara, 2016a<sup>47</sup>; 荻原, 2018<sup>23</sup>）。

加えて、児童期から中年期までの年齢差のパターンは欧米の先行研究と一致していたが、欧米文化における先行研究とは異なり、50 歳以降で自尊心が低いという傾向は見られず、自尊心の発達的軌跡が文化によって異なる可能性を示した（Ogihara, 2019<sup>48</sup>; Ogihara & Kusumi, 2020<sup>47</sup>）。

また、こうした年齢差のパターンに性差はほとんど見られず、男性と女性で一致していることも示した（Ogihara, 2020c<sup>49</sup>; Ogihara & Kusumi, 2020<sup>46</sup>）。

†† その詳細については、紙面の制約の都合上、別の機会に行う。

## 2. 位置づけ

自尊心の年齢差については、文化の変容、特に自尊心の経時的变化の研究を実施する際に必要であったことが、このプロジェクトを進めることになった理由のひとつであった。自尊心の年齢差に関する研究は、海外では十分な蓄積があったが、日本では十分に検討されていなかった。

また、時代の変化という時間軸に加えて、人の一生における変化という異なる時間軸についても視野に入れて検証したかった。さらに、年齢差は、性差と並んで、心理の個人差を説明する代表的な基礎的変数でもあり、自尊心の理解のためには重要な変数であったことも関係している。

連携プロジェクトの中では最も規模が小さく、対象としている現象の幅も狭い。

## V. まとめ

本論文では、著者が筆頭研究者としてこれまで行ってきた、複数の研究プロジェクトの概要を説明し、その相互の関連を整理した。まとめると、中核のプロジェクトは、文化の変容が心理に与える影響、特に日本文化の個人主義化が人々の対人関係や幸福感に与える影響を明らかにすることである。そのために、文化の変容・名前・自尊心の年齢差に関する研究を連携プロジェクトとして行ってきた。

## 文献

1. Ogihara, Y. (2020b). Regional differences in individualism in Japan: Scoring based on family structure. *Frontiers in Psychology*, 11, 1677.  
<https://doi.org/10.3389/fpsyg.2020.01677>
2. 萩原祐二・内田由紀子・楠見孝 (2013). 対人関係におけるコントロール方略が感情状態に及ぼす影響 対人社会心理学研究, 13, 9-14. <https://doi.org/10.18910/25842>
3. Ogihara, Y. (2017). Temporal changes in individualism and their ramification in Japan: Rising individualism and conflicts with persisting collectivism. *Frontiers in Psychology*, 8, 695. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2017.00695>
4. Ogihara, Y., & Uchida, Y. (2014). Does individualism bring happiness? Negative effects of individualism on interpersonal relationships and happiness. *Frontiers in Psychology*, 5, 135. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2014.00135>
5. Ogihara, Y., Uchida, Y., & Kusumi, T. (2014). How do Japanese perceive individualism? Examination of the meaning of individualism in Japan. *Psychologia*, 57(3), 213-223. <https://doi.org/10.2117/psysoc.2014.213>
6. 萩原祐二 (2013). ブータンを訪れて—ブータンの幸福を支える背景— ヒマラヤ学誌, 14, 207-210. <https://doi.org/10.14989/HSM.14.207>
7. Ogihara, Y. (2018a). Economic shifts and cultural changes in individualism: A cross-

- temporal perspective. In A. Üskü & S. Oishi (Eds.), *Socio-economic environment and human psychology: Social, ecological, and cultural perspectives* (pp. 247-270). Oxford: Oxford University Press. <https://doi.org/10.1093/oso/9780190492908.003.0010>
8. 萩原祐二 (2025). 文化の変容研究を俯瞰する：変容の背景・方法論・個人主義化 人間環境学研究, 23(1), 53-58. <https://doi.org/10.4189/shes.23.53>
  9. Ogihara, Y. (2021a). Direct evidence of the increase in unique names in Japan: The rise of individualism. *Current Research in Behavioral Sciences*, 2, 100056. <https://doi.org/10.1016/j.crbeha.2021.100056>
  10. Ogihara, Y. (2022a). Common names decreased in Japan: Further evidence of an increase in individualism. *Experimental Results*, 3, e5. <https://doi.org/10.1017/exp.2021.27>
  11. Ogihara, Y., Fujita, H., Tominaga, H., Ishigaki, S., Kashimoto, T., Takahashi, A., Toyohara, K., & Uchida, Y. (2015). Are common names becoming less common? The rise in uniqueness and individualism in Japan. *Frontiers in Psychology*, 6, 1490. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2015.01490>
  12. Ogihara, Y., & Ito, A. (2022). Unique names increased in Japan over 40 years: Baby names published in municipality newsletters show a rise in individualism, 1979-2018. *Current Research in Ecological and Social Psychology*, 3, 100046. <https://doi.org/10.1016/j.cresp.2022.100046>
  13. Ogihara, Y. (2025d). Uncommon names are increasing globally: A review of empirical evidence on naming trends. *Humanities and Social Sciences Communications*, 12, 1826. <https://doi.org/10.1057/s41599-025-06156-1>
  14. 萩原祐二 (2023a). 人名の読み方とその不確定性：実証研究の概観 日本語学, 42(2), 142-155. 2023年6月夏号
  15. Ogihara, Y. (2020d). Unique names in China: Insights from research in Japan— Commentary: Increasing need for uniqueness in contemporary China: Empirical evidence. *Frontiers in Psychology*, 11, 2136. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2020.02136>
  16. Ogihara, Y. (2023b). Historical changes in baby names in China. *F1000Research*, 12, 601. <https://doi.org/10.12688/f1000research.131990.2>
  17. Ogihara, Y. (in press). Historical changes in given names in France: Insights from research on cultural change. *Population and Economics*.
  18. Ogihara, Y., & Uchida, Y. (2024). Seeking unique dogs: The increase in individualism in Japan. *Acta Psychologica*, 251, 104558. <https://doi.org/10.1016/j.actpsy.2024.104558>
  19. Ogihara, Y. (2018b). The rise in individualism in Japan: Temporal changes in family structure, 1947-2015. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 49(8), 1219-1226. <https://doi.org/10.1177/0022022118781504>
  20. Ogihara, Y. (2023a). Chinese culture became more individualistic: Evidence from family

- structure, 1953-2017. F1000Research, 12, 10.  
<https://doi.org/10.12688/f1000research.128448.3>
21. Ogihara, Y. (2016b). The change in self-esteem among middle school students in Japan, 1989-2002. *Psychology*, 7(11), 1343-1351. <https://doi.org/10.4236/psych.2016.711136>
  22. Ogihara, Y., Uchida, Y., & Kusumi, T. (2016). Losing confidence over time: Temporal changes in self-esteem among older children and early adolescents in Japan, 1999-2006. *SAGE Open*, 6(3), 1-8. <https://doi.org/10.1177/2158244016666606>
  23. 萩原祐二 (2018). 日本における自尊心の発達的変化—中学生から高齢者における自己好意の年齢差の検討— *対人社会心理学研究*, 18, 133-143.  
<https://doi.org/10.18910/70551>
  24. 萩原祐二 (2017). 日本における成果主義制度導入状況の経時的変化—年功制の縮小と年俸制の拡大 (1991-2016) — *科学・技術研究*, 6 (2), 149-158.  
<https://doi.org/10.11425/sst.6.149>
  25. Ogihara, Y. (2024). Numbers of articles in the three Japanese national newspapers, 1872-2021. *Scientific Data*, 11, 437. <https://doi.org/10.1038/s41597-024-03245-9>
  26. Ogihara, Y. (2025b). Newspaper article counts and their generation method are reliable: Recollecting data and analyzing temporal differences. *F1000Research*, 14, 291.  
<https://doi.org/10.12688/f1000research.162339.1>
  27. 萩原祐二 (2015). 近年の日本における個性的な名前の特徴とその類型 *人間環境学研究*, 13(2), 177-183. <https://doi.org/10.4189/shes.13.177>
  28. Ogihara, Y. (2021b). How to read uncommon names in present-day Japan: A guide for non-native Japanese speakers. *Frontiers in Communication*, 6, 631907.  
<https://doi.org/10.3389/fcomm.2021.631907>
  29. Ogihara, Y. (2023c). Popular names are given less frequently to babies in individualistic countries: Further validation of unique names as an indicator of individualism. *Current Research in Behavioral Sciences*, 4, 100094. <https://doi.org/10.1016/j.crbeha.2022.100094>
  30. Ogihara, Y. (2025c). Popularity and diversity: The negative relationship in baby names in the United Kingdom. *F1000Research*, 14, 424.  
<https://doi.org/10.12688/f1000research.162476.2>
  31. 萩原祐二 (2022a). キラキラネームの定義とその構成要素 *人間環境学研究*, 20(2), 71-79. <https://doi.org/10.4189/shes.20.71>
  32. 萩原祐二 (2023b). キラキラネームの定義と表記—過去の「現代用語の基礎知識」の検討— *科学・技術研究*, 12(1), 67-72. <https://doi.org/10.11425/sst.12.67>
  33. 萩原祐二 (2023d). 「キラキラネーム」の表記とその使用頻度—新聞と学術文献の分析— *人間環境学研究*, 21(1), 33-38. <https://doi.org/10.4189/shes.21.33>
  34. 萩原祐二 (2022b). キラキラネームは本当に増加しているのか? *人間環境学研究*,

- 20(2), 129-133. <https://doi.org/10.4189/shes.20.129>
35. 萩原祐二 (2023c). 名前の読みを制限する戸籍法改正は、個性的な名前を減少させるか？ 科学・技術研究, 12(2), 121-124. <https://doi.org/10.11425/sst.12.121>
  36. Ogihara, Y. (2021c). I know the name well, but cannot read it correctly: Difficulties in reading recent Japanese names. Humanities and Social Sciences Communications, 8, 151. <https://doi.org/10.1057/s41599-021-00810-0>
  37. Ogihara, Y. (2022d). Further explanations for difficulties in reading recent Japanese names correctly. Frontiers in Education, 6, 799119. <https://doi.org/10.3389/feduc.2021.799119>
  38. 萩原祐二 (2022c). 名前を正しく読むことはなぜ難しいのか 人文×社会, 2(8), 1-7. [https://doi.org/10.50942/jinbunxshakai.2.8\\_1](https://doi.org/10.50942/jinbunxshakai.2.8_1)
  39. Ogihara, Y. (2022c). Ethnic differences in names in China: A comparison between Chinese Mongolian and Han Chinese cultures in Inner Mongolia. F1000Research, 11, 55. <https://doi.org/10.12688/f1000research.76837.1>
  40. Ogihara, Y. (2020a). Baby names in Japan, 2004-2018: Common writings and their readings. BMC Research Notes, 13, 553. <https://doi.org/10.1186/s13104-020-05409-3>
  41. Ogihara, Y. (2022b). Common writings of baby names in Japan, 1989-2003: Explanation of survey data. Data in Brief, 40, 107678. <https://doi.org/10.1016/j.dib.2021.107678>
  42. Ogihara, Y. (2025a). Baby names in Japan, 2019-2024: Common writings and their readings. Data in Brief, 60, 111497. <https://doi.org/10.1016/j.dib.2025.111497>
  43. Ogihara, Y. (2021d). Social security number holders in the United States, 1909-2019. Frontiers in Big Data, 4, 802256. <https://doi.org/10.3389/fdata.2021.802256>
  44. 萩原祐二 (2022d). 「たまひよ赤ちゃんの名前ランキング」における調査方法の変化 科学・技術研究, 11(1), 43-46. <https://doi.org/10.11425/sst.11.43>
  45. 萩原祐二 (2024). バーチャル YouTuber (VTuber) の名前と人間の名前の相違点—一人名の持つ制約からの検討— 科学・技術研究, 13(1), 65-70. <https://doi.org/10.11425/sst.13.65>
  46. Ogihara, Y., & Kusumi, T. (2020). The developmental trajectory of self-esteem across the life span in Japan: Age differences in scores on the Rosenberg self-esteem scale from adolescence to old age. Frontiers in Public Health, 8, 132. <https://doi.org/10.3389/fpubh.2020.00132>
  47. Ogihara, Y. (2016a). Age differences in selfliking in Japan: The developmental trajectory of self-esteem from elementary school to old age. Letters on Evolutionary Behavioral Science, 7(1), 33-36. <https://doi.org/10.5178/lebs.2016.48>
  48. Ogihara, Y. (2019). A decline in self-esteem in adults over 50 is not found in Japan: Age differences in self-esteem from young adulthood to old age. BMC Research Notes, 12, 274. <https://doi.org/10.1186/s13104-019-4289-x>

49. Ogihara, Y. (2020c). The pattern of age differences in self-esteem is similar between males and females in Japan: Gender differences in developmental trajectories of self-esteem from childhood to old age. *Cogent Psychology*, 7: 1756147.  
<https://doi.org/10.1080/23311908.2020.1756147>